第4章：座談会
Chapitre 4: Entretiens

パリクラブの誕生

出席者： **渡辺昌俊、副島勲、関本勘次**（アルファベット順、敬称略）
司　会： **池上久雄**

第１部

池上　皆さん、今日はお忙しいところ集まりいただきまして有難うございます。今日は、パリクラブの過去の歴史、現在、そして、これからの発展その他について、創立の時から実際に汗をかいて働き、今までここまで会を育ててきて下さった名誉会長のお二方、渡辺さん、副島さん、それから設立当時からSecretary Generalということで会長代行をずっとやってこられた関本さん、この3人に設立から今までの話を中心に伺っていきたいと思います。

まず第一に考えたいのは、会が設立したのが1993年ですが、それに至るまでには、こういうものを創ろうという機運が出てくるのには歴史があったと思うのですけれども、それに至る歴史というか、皆さんがこういうものを創っていこうと踏みきられたその歴史の状況などを、時代の検証として、我々はあまり知らないので伺っていきたいと思います。

副島　私は若干貿易に携わっていたのですけれども、1960年に最初にフランスに来た時には、いわゆる日本の方が輸入超過であったわけです。それで私自身も機械の輸入のためにフランスに来たわけですが、日本は全くある意味では物の数ではない相手だったわけですから、対仏輸出というのは考えられないような状況で、せいぜい繊維ぐらいだったわけですね。

私が来ましたのは1962年です。それから60年代ずっと68年までいたわけですが、その間の状況はおおよそ種撒きの時代であったわけです。それが1980年代になってポワティエ戦争といわれるものが起こるくらい日本の産業が活発化した、実際にChantier Atlantique等の閉鎖、造船会社の閉鎖ということもあって、テレビでは『日本人が潰した』と言われました。その後自動車も、工作機械であるとか繊維もそうですし、電子工学や家電関係も含めいろいろと各方面でですね、そういうことで、1980年代に起こってきたそういう対日感情も含めたフランス側の気持ちが出てきたということです。そういうことで考えますと、やはりこういう貿易関係というものは相互に理解がなければその時代時代の一点だけを捉えて考えるべきではない。そのためには日頃の努力が必要であるということです。何かをやらなければいけないなということは、もちろん渡辺さんは感じておられたわけですし、そのためにフランス商工会議所の理事もしておられたわけです。一連の動きはそういうことで始まったわけです。

池上　渡辺さんは何回もパリに行っておられますし、金融面ということで日本の産業界を横通しで見られていた立場でもあり、その歴史に対してよけい感じられたところも多かったと思うのですが、その辺の流れというものはどういうものだったのでしょうか？

渡辺　そうですね、貿易には携わっていないんですけれども、東銀の支店長が歴代在仏日本商工会議所の会頭をやる

という不文律がありまして、結局私もそれを引き継いで80年代やったんですけれども、東京銀行ができましたのは62年です。なんとなく、物の動きはわからないけれど時代の流れというものは感じてましたね。今副島さんがおっしゃっていた中で何が転換点になったかというと、私の記憶では、これは私は丁度いなかった時ですけれども、土光ミッションがフランスに来たのです。70年代の終わりだと思います。土光ミッションが来て、そこで初めて、非常に厳しい、要するに『日本が悪いんだ、おまえ達は働き過ぎるんだ』というようなことですね。当時はジョベールという外務大臣がいて、彼は知る人ぞ知る大変な人物ですが、彼が確か『日本人はいない方がいい』というような発言をしたのです。これは通訳がどのように訳すかによって違う真意があるのですけれども。そういうことで、日本人というのはなにか優等生だ、優等生で働きすぎて、勉強しすぎてですね、ずば抜けてできちゃう、皆で一緒に遊ばない。何ていうんですかね、ガリ勉で優等生で一番だ、そういう奴はむしろいない方がいいんだというようなことを、確か私はそんなことを聞いたのを覚えています。あの辺が転換点ではないですか？

副島　そうですね、私もそう思いますね。日本人の文化というものがまだ知られていない時代でしたから、そういう面でも私どもの努力が足りなかったんだなと思うのですが、日本人はいわゆるホモエコノミクスだけであって、有害無益であるという見方をされ、肩身の狭い思いを確かにしましたね。

渡辺　日本との関係について、非常に象徴的なことを1つだけ、これは私の知ってる限りで申し上げると、ジスカール・デスタンが大統領になったのが74年で、7年間ですから81年までいたわけですよね。ジスカール・デスタンが大統領の間に日本の対仏投資、これは代理店1つ創るというコマーシャルを含め、そして工場を1つ創るというインダストリアルを含めてゼロですよ。

皆　そうですかね？

渡辺　7年間ゼロですよ。いや、間違っていたら訂正してほしいんですけれども、私の記憶では、YKKが出たのは60年代ですよね。そしてYKKの後がないんですよ。要するに銀行取引を通じて見た場合…。

副島　銀行取引のなかったケースで何社かありました。私共で会社を創った経験から言いますと、要するに販売会社を各社最初に創ったわけです。これは、確かに抵抗があったんですが、直接ネゴで上の方から許可になったケースはある。会社設立は、池上さんの方もそうかもしれませんが…。

池上　エレベータ会社やコピー会社。ただ、1974年の石油ショックで、がらっと変わり相当手控えたのは事実です。その辺、関本さん、輸出入銀行でやってこられていかがでしたか？

関本　私の場合は、79年にパリに赴任し、日本輸出入銀行ですから、もっぱら輸出信用の問題、それから先程ちょっとお話が出た船舶、特に造船の関係ですが、造船関係では船舶輸出、こちらの方が大変に摩擦というよりも日本の輸出信用制度自体を何とかしろ、というようなOECDを舞台とした圧力が非常に高まったんです。そこから先は確かにずっと88年まで日本の経済は上り詰めていくわけですが、その間にあった関係というのは、フランスとの関係というよりも世界の関係という方が貿易摩擦だらけであったと思われます。輸出信用の舞台というのは結局設備あるいはもう少し長いもの、先程話に出ました直接投資に似つかわしいようなそういったもの、そういった関係が恐らく物の輸出・サービスとは別に非常にややっこしいものの関係が多かったと思います。そんな関係で、副島さんには大変に、アルジェリアあるいはモロッコ、それからポーランドやあちらの方の関係含めていろいろとお話をいただいたことがありますし、多分に74年から81年にかけてゼロであったということは、それはありえるかもしれませんが、その前にいわゆる対仏直接投資は一応済んでいる、欧州東銀なんかはその前にできているのでしょうから。

副島　具体的にはですね、クボタ・光洋、その他に70年代に4、5社創ったんです。このやり方はですね、直接乗り込むんですよ。例えば局長室とか、ある時は弁護士を使いました。申請書類はどこで止まっているかわからないですけれどね。そんな使い分けが向こうでは非常に大事であり、何とか切り抜けて創ったということです。ですから、表立った許可というのは非常に少なかったというのは事実です。

池上　そうすると、当時は日本が出ようとしたけどフランス側がNOと言ったということですかね？

渡辺　そうです。

池上　そして、その延長が、結局日本はプラザ合意85年で日米とももものすごいFrictionがありましたし、有名なポワティエのというのは、この辺についてはどんないきさつだったのでしょうか。

渡辺　こういうことではないでしょうか。81年までがジスカールでしたよね。81年5月からミッテランになった。ジスカール・デスタンの時は今言ったように非常に日仏関係が冷却したというか日本はいらないということでしたが、ミッテランになっていわゆる日本を知っている官僚、親日派、具体的にはエネキンとか、それから今フランス国鉄をやっているかな、ルイ・ガロワとか、それからダニエル・ルベク、今は彼は何もしていないけど、当時Directeur du TrésorからBNP、要するに親日派がミッテランをずっと取り巻いたわけです。ミッテランの意図なのか誰の意図なのか知らないけど、私の赴任がたまたま82年の正月ですから、それに重なるんです。そこで皆、これで日仏関係はよくなるって言ったわけです。それを裏書きするようにミッテランが日本に行くということになった。これは日本とフランスの外交関係は長いけれど、フランス元首が日本を正式訪問するのは、サミットとか何かを別にすれば初めてなんで

すね。それで、あ、これはと皆思ったんです。ところが、それから間もなくして、今おっしゃったポワティエの戦いが始まったわけです。あれは、日本から輸入するビデオの通関をマルセイユとかルアーブルではなくて、ポワティエの山の…。

副島 内陸もいいとこですよね。

渡辺 300km位じゃないですか。ルアーブルから。

渡辺 そこの山の中でするということが決まったわけです、ある日突然。背景はもちろん、ビデオの輸入がもう突出して増えて、しかもフランスでは製造できない。

関本 もう1つ、ミッテラン社会党大統領というとことで、大統領就任後キャピタルフライトがすごかったでしょ。

池上 外へ逃げたということですね？

関本 そう、フランスから資本が逃げた。それで、クレジットカードをフランス国外で使うのに制限があった気もします。恐らく、そういう基本的なファンダメンタル的なところにそういう問題があったんだろうと思います。

副島 確かにですね、ミッテランが大統領になった時に、これは日本側も非常に予想外で、当選した時にはテレビ各局が私共のところに来ましたし、実際にCNNのインタビューも受けました。フランスでは今後どうなるのか、特に原子力発電の存続問題も含めてですね、大変日本側としては混乱していたわけですよ。日本側にとっては、社会党政権、当時はいわゆる拒絶反応、そういうこともあって、ミッテランとしては、先程おっしゃられたように、修復をしなければいけないというアージェントな問題があったのではないでしょうか。対日、ジスカル・デスタンの体制では、日本嫌悪の体質、あるいは問題にしないという体質は、ずっとまだ引き続いていたんでしょうね。ジスカル・デスタンが日本について一番知っていたのは日本の文化なんです。文化については、ジスカル・デスタンはG7の時に来ても、彼だけは吉兆に行っても、『この器はすごいな』とかですね、掛け軸をアプリシエイトしたり、これは吉兆の料亭の女将さんから直接聞いたんですけどね（笑）。もう、全然違うというぐらい、日本の事、文化については関心を持っていた人であり、そういう意味では、我々はアプリシエイトしていいんですが、こと経済に関してはですね、確かに私共やりにくい時代だったわけです。側近も悪かったんでしょうね。そういうことは彼の名誉のために一言付け加えたいと思います。

渡辺 今のところをもうちょっと補足すると、私はジスカール・デスタンの時もそうだったんですけど、フランスは官僚が非常に強いと言われますが、若手の官僚が結構権力はないかもしれないが、重要な役割をしている。そこが窓口で全部交通整理してしまおうというようなところがあるでしょ。たとえば、なんとかこれこれを創りたいと言うと、いやー、日本側1人で創らせたら大変だからこれを合弁にしようとか、そういうのは皆窓口の若いシャルジエ ド ミッションですよね。学校出たての若いのが、決めちゃう。ですから、ポワティエの措置も、これは恐らく若い官僚が数字を見てね。日米に比べ日仏なんて、数字を見れば大した事ないわけなのにね。

池上 そのような80年代前半の結構激しい対立は後半になるとどんな風になったんですか。

副島 貿易は輸出入とも1%位です。ですから、本当に双方にとってはネグリジブルです。当時の欧州域内取引はフランスは50%です。だから、そういうことを考えると物の数ではないんだけれども、若干感情的にそういうことが。

渡辺 伸びですよね。伸びと、もう1つ彼等が言っているのは輸出と輸入のカバー率というのをよく使っていましたね。

関本 それは使っていましたね。

渡辺 フランス輸出と日本からの輸入のこのカバー率が悪いと。全然改善するメドがたたないわけですよ。ポワティエ問題については、当時内田大使から、『民間の問題なんだからやらなければだめだよ』と発破かけられて、あるフランス人の友達に『私はどうしたらいいんだろう』と聞きに行ったら、『とにかくフランスは動かなければだめだよ』というようなことで、まず首相のピエール・モロア以下に手紙を書けというんです。私は手紙を書いたんですよ。ほとんどの人から返事がきまして、こうこうこうだと。面白かったのは、例えばクレソンは貿易相だったですよね。彼女いわく、『いや、これは私じゃない』と、『これをやったのは財務省だ』と。

池上 彼女はそんな立場だったんですか？

渡辺 うん、財務省で、当時ローラン・ファビウスが、予算大臣ですよね。Ministre Délégué du budgetとかいうんです。それで彼が決めたんだとか。そんなような返事が来たんですよ。あーいうのを見ても、私がさっき言ったように恐らく若手の官僚がこうしたんじゃないかなと思います。

池上 80年代後半から90年、これは日本がバブル頂点になって、突然崩れる、この辺のところの日仏関係はどうだったんでしょうか？

渡辺 後半については私は85年までしか知らないんですが、帰ってきてからもフランスの銀行に移りフォローしていたから言えるんですが、要するに埒が明かないわけです。ポワティエは結局1年足らずで終わったんですよ。

池上 そうですね。有名になったわりにはあまり大きな実績はなかったですね。

渡辺 ポワティエ後、何とかしなければいけないということで、2つの大きな措置がとられました。1つは、日本はフランスに売るのではなくフランスに来て作ってくれという直接投資の動きです。そこで、DATARというのが出てきて、過疎地域へできるだけということで、ソニーのピレネー、キャノンのブルターニュです。もう1つは、あまり実らなかったのですが、第三国協力です。

副島 80年代初めの土光ミッション以降、輸入促進ミッション、これは私共商社としては一番力を入れたものの1つ

でした。逆に言えば、フランス側の努力が足りないんじゃないかということも認識してもらえるいい機会だということで、当時日本から、これは池上さんもよくご存知で、当時おられた頃でしょうから、何度も来ました。その度に各班に分かれて、機械とか食料とか商品によって5班位に分かれるんですね。

池上 JETROがだいぶこの辺から活躍しだしましたね。

副島 そうですね。要するに、後でこれはパリクラブの誕生に結びついてくるんですけれども、その時のミッションの時にフランス各地を回って、日本はこれを買ってあげられるんじゃないか、例えば自動車のアクセサリー、パーツ、それから部品そのものコンポーネンツに関して、"これはできますよ"ということを言って、"それじゃカタログ、資料を送ります"と約束はするでしょ。1ヶ月経ち、2ヶ月経ち…来ない。

皆 (笑)

副島 いやいや、これは大事なことなんですよ。我々は"買いますから資料を下さい"と言っているのに来ない。これをフランス側に、いかに体制がそうなっていないかということを認識してもらう1つのきっかけとなったのが、あのミッションですよ。相互にこういうことで問題があるんですよと。

関本 私の方の関係で今の話をもう少し付言しますと、その頃もう輸出が悪者になるわけですね。それで、直接輸入を大いにやるべしと。そして輸入についてどういうことができるか。それが、それまで1つの日本の基本方針であった輸出が打って変わるような形で出てくるわけです。そして、輸出信用の関係でいえば、どんどん信用の中身が第三国の品物がどれだけ入ってもいいといったような関係ではどんどん緩和されていく。そして結局輸出信用自体が恐らく形骸化していって、輸入を促進するような意味での投資について、どのようなお金を貸せるかということに、やはり80年代の特に85年から先は特にそういうこと一貫していたと思います。それから、JETROなんかもその頃Exportという言葉はお使いにならない。

池上 名前を変えたのはそのせいですね。

渡辺 External Tradeに変えたんですよね。

池上 それは、要するに輸出努力が足りない。

関本 全く足りなかった。

渡辺 返事が来なかったぐらいではなく、そういうおいしいものを差し上げても、もうヤダと。

副島 その当時はね、私共はパリにいて、増田さん、池上さん、渡辺さん、関本さんもおられて、非常に親しくできたのは、1つはそういう苦労を中心に日本人の社会で協力して何とかしようと。また、その時のJETROの豊島さんがいろんな意味で中心になって私共はよく打ち合わせをしました。この想いは、私個人的には非常に強いんですよ。そして、いわゆる、戦友意識ができた。その戦友意識でしかもパリ…懐かしい。フランス…懐かしい。なんとかフランスにも何かしてあげたいという気持ちになり、同窓会を創ろうということに。当時私は渡辺さんに相談して、豊島さんを中心にパリ同窓会を創ろうじゃないか…と言ってできたのが、ある意味でこれは非常に大きかったのですけれども…パリクラブの最初の呼びかけの母体になったのです。恐らくそれがなかったら、どこに手紙を出してどうするかというのは難しく、発起人を探すもの非常に難しかった。これが、非常にフランスにいた人達の有り難味だなと、後で思いました。

池上 ようやく第1部が終わって、これでパリクラブの前夜まで来たわけですね。

第2部

池上 第一部では、パリクラブ創立、創業の前夜までの日仏関係の動きについて実際に現場で身をもって経験したお話として伺いました。パリクラブを設立しようという動き、フランスで一緒だった同窓会ができその仲間達ということもあったようですが、2つの流れがあると思うんですよね。1つは、今の日本人の同窓会的な集まろうという動き、もう1つは渡辺さんの方の、商工会議所から、フランス側からも何かこの機会にという、この2つの筋がどこでドッキングしたのか少しお話をお聞かせ下さい。

渡辺 東京銀行の先輩に山田史朗さんがいます。1991年11月に山田史朗さんがフランスから国家功労賞をもらったんですよ。これは非常に意味があるんですよ。どういう意味があるかと言えば、山田さんを推薦したのは、ご本人もおっしゃっていますけど、DATARなんですよ。DATARが日本の対仏直接投資を一生懸命後押しした山田さんの功績を認めたというのは、これは大きいですよね。

関本 大きいですね。

渡辺 今までは、フランス側はNOという態度でしょ。それから裏話に出てきたような態度でしょ。それをやってくれたということで日本人の労をねぎらうというのは、これは大変大きい事ですよね。私としては、この91年の動きというのはかなり意味があるのではないかと思うわけです。

池上 これも前夜の事情の1つですね。

関本 DATARが91年には日本にもう来てたということですね。

副島 実際に豊島さんを囲むパリの同窓会というのが、90年にできてですね…。

池上 90年ですか?

副島 はい。私は豊島さんに相談したのを覚えています。実は豊島さんも、皆で集まるといいなと、日頃会食の中で言っておられたんです。それでは皆に声をかけましょうと言って、最初に集まったのは数人でした。数人で食事をしたんです。その次に集まったのが、これは『維新号』で、あの時は20数名の方が2つか3つのテーブルに分かれてですね、これは関本さんもお出になったし、渡辺さんももち

ろん…。

渡辺 私が幹事をやりました。お金の幹事（笑）。

副島 渡辺さんにはお金の幹事までしていただいてありがとうございます。そういうことで、そういう会が発足しました。

池上 90年に数人で第1回目をやって、第2回目を。

副島 91年。そして、『維新号』、ニューオータニの前のレストランでやって、その後、さっきおっしゃった山田史朗さんのシュバリエ章があって。

渡辺 私がなぜお金の幹事をしたかと言うと、私の記憶では、山田さんから、"山田さんのための会だからやれ"って言われたんですよ（笑）。

関本 2回です。『維新号』で2回やりましたよ。

渡辺 国会から保利さんが駆けつけて…。

関本 2回目の方がたくさん人数がいましたね。

副島 一番大きいのは渡辺さんがスエズ・インドシナ銀行日本代表時代にフランス商工会議所の理事になられたことで、その後副会頭にもなられた。そういうことが、1つの大きな商工会議所と日本人とのパイプになったんですね。そして、山田さんと私などが会議所の顧問の役をすることとなった。

池上 山田さんは長くやっておられましたね。

関本 顧問のもうひと方は、安達省三さん。それから、一応磯村さんもシャンブルのデスクに時々通っていた。

副島 渡辺さんとはパリ時代にもまだ山田さんがおられた頃からダブってですね、何度もお会いしていたわけなんですけれども、そういうこともあって、親しく話をする機会ができ、そこで始まったのが…。渡辺さんの方に商工会議所の方からひとつの働きかけというのか、あるいは渡辺さんがそういう話をされたのかは知りませんけれども、そこにパリクラブ的なものをいわゆるパレナージュをやってくれないかという依頼があった。その件で渡辺さんと初めて打ち合わせをした。

池上 なるほど。

副島 これは92年の9月8日。

池上 これは画期的な日ですな。

副島 場所は駿河台の『いろは寿司』です。そして、最初に渡辺さんはパレナージュの話しをされたんです。なんか助けてくれということを商工会議所が言っていて、いろんなイベントに日本人にも参加してもらいたい。しかし、どこへ頼んだらいいのかわからない。そういう答えもないし、いわゆるフランス商工会議所並びにフランスから進出している企業の人達のパレナージュをしてくれないかと言われているけれども、やれたものかどうかというご相談を受けたんです。私はその時に即答したんです。『それは是非やるべきじゃないんですか』と。渡辺さんはその中で大きなパイプを持っておられる、ということで、それじゃどういう形で進めたらいいかという相談をしようということになって、最初に会合を持ったのは、9月15日か14日、コアンヌさんとビュッシュさん、デュボアもいた。それから脇田さんの4人か5人で会ったんです。会ったのは私の記憶では『イル・ド・フランス』です。そこで会って、その席でそれではやろうと。どういう人をリーダーにお願いするかでは、パリ時代に皆がお世話になり、日本の顔でもある磯村さんがいいと言うことで早速、9月16日に磯村さんを渡辺さんと一緒に南麻布の事務所に尋ねて行ったんです。

NHKを退任された直後位でしたね。"こういうことで意義がありますからやってください"というお願いをしたんです。その時に、磯村さんからは、会の設立趣旨などの質問があった。その時に私が言ったのは、"マクロ的にはこれまでギクシャクしてきた両国間の関係の改善と企業間の相互理解、ミクロ的に言えば、我々は向こうで苦労しました、同じようにフランス人が日本で苦労しています。さきに苦労をしてきた人たちが今苦労しているひとたちのパレナージュをするというのは非常に大きな意味があるんじゃないですか"と。これは思想的には、後のランデヴー・フランコ・ジャポネの母体となっているわけなんですね。"そういう意味でやりましょうよ"、と。磯村さんはご存知の通り超多忙な方だったんですけれども、快く引き受けていただきました。

池上 ありがとうございました。明治維新前夜みたいな動きがあって（笑）。ここのところで同窓会ができて、だんだん準備が整ってきた。あと、そこに火がつけばすぐ燃え上がるような同窓会的なものが出てきた。その火がつく火というのは、そこはどんな風だったんですか？

渡辺 それは一言で言えば、"Le Japon, c'est possible."ですよ。さっきおっしゃった80年代の後半は、直接投資と、第三国協力での流れできましたね。それから、バブルがなんとなく終焉に向かって、日仏関係がどうなったかというのは、そこのところははっきり言って覚えていない。私にしてみると、92年に突如、Le Japon, c'est possible.が出て、そのpossibleの後に感嘆符がつくのか疑問符がつくのか、そ

Le Japon, c'est possible !

1990年10月25日週刊誌レクスプレス2136号の経済特集のタイトルは、まさにLe Japon, c'est possible !（末尾には？でなく！が付いていた）一部紹介すると、「貿易収支はフランスの300億フランのマイナス。日本の投資は逆の20倍。ではもうお手上げか？いや、そうではない。市場は開かれつつあり、構造上の障害は取り除かれつつある。いまや、Oui, le Japon, c'est possible !」。成功のカギは？「自らの手法を押しつけず、そのまま日本で通じると思わないこと」、「個人の価値は、日本では同じ意味をもたず、集団の観念が優先する」、「競争市場では、日本製品以上に高品質でなければならない」。1907年に創立し堅実な経営によって発展してきたエア・リキード社の子会社テイサンを紹介し、「従業員教育こそ最優先策。1950年以来、親会社研修に」（同社取締役・小松原道彦氏）。記事は結論として「とかく西欧人は日本人を征服者とみてきた。今までは確かにそうだ。相手を理解し接近することの努力は主に日本人の側から行われ、これからも続けるだろう」として、フランス側からも試みよう！と鼓舞している。

れはいろいろあるんですけどね。実は日本の外務省、当時小倉大使が本省におられて『Oui, c'est possible.』という白書を出したんです。私はこれだけは残しておきたいんですが、やっぱり、アラン・コアンヌの偉さですよ。アラン・コアンヌがなぜ偉いかと言うと、Le Japon, c'est possible.が出る前から、ローヌプーランのトップで仕事をして、"仏仏じゃだめなんだ"と、"フランコ・フランセじゃダメなんで、フランコ・ジャポネじゃなければね、日仏関係は進まないんだよ"ということを、自分がフランス商工会議所の会頭になった時に…。そのころパリの日本商工会議所もやはり日本人だけの集まりで、日本側も全く同じだったんですよね。いずれにしても、彼は"俺はフランコ・ジャポネでいく"って。彼は『Ouverture de la Chambre de Commerce Française au Japon』と言って、ouvertureという言葉を使いましたよ。それで、日本人の私が理事になったものだから、まず日本人のメンバーを増してくれって言うわけです。

パリクラブの正式名称"日仏経済交流会"という名前の名付け親は当時専務理事をしていたパスカル・ビュッシュなんですよ。

池上 あー、そうなんですか。

関本 Groupe Economique Franco-Japonais。

副島 正式名称はそうでした。日英関係ではロンドンクラブがあったから。

渡辺 ありきたりはもうやめようということなんですよね。

副島 1993年の2月16日Paris Club、しかもカッコとしてありますが、この第1回懇親会を小人数で東京クラブで行いました。これは小人数で5、6人で、磯村さんに来てもらって。

渡辺 磯村さんがそこのメンバーで、お昼だったら行けるっていうので。

副島 そして、次の3月11日に会則案をつくらないといけないということでこれの打ち合わせをやったんです。これは、関本さんに草案を依頼したんです。そして、それを元に設立準備委員会として発足しようじゃないかということを決めたんです。その間にCCIFJとの打ち合わせを3月15日にやって、18日に我々にとって第2回で本当は第1回なんですけどね。パリクラブ創立の具体的打ち合わせをシーボニアメンズクラブでやったんです。それから4月1日に結局内輪でのマスコミ対策とか会則とか内輪では正式に決まりました。第1回会合、パリクラブ発起人会というのは4月6日にやってるんです。これの場所は九段の海外投融資情報財団です。

関本 久米五郎太さんがそこの常務をやっておられたんです。

副島 そして、最初からの豊島会のメンバーなんです。そういうこともあって、そこをお借りした。これで発起人会が無事成立し、その次に創立総会をいつやろうかということになりました。

関本 4月20日です。

副島 東京クラブで、磯村さんの講演を第一部として、設立総会を開きました。設立総会に出てきた方の人数は60人位かな。

関本 呼びかけた人数は148名。だけど、出てきたのは、60人位ですよ。

副島 その前に発起人の会に集まって下さいということで集まったのは、20人足らずでした。その時のリストはあるんですけど、わずか1ページですよ。しかも、Paris Club会員名簿というのを既に作っちゃったんですね。ずうずうしく（笑）。

副島 そのリストの出席者にマークをしているのがこれで16名です。とりあえず、順をおっていきますとそういうことです。あとはご存知の通りでですね。例のParis Club打ち合わせとか、イベントとか、ミニデバとか、そういうものが出てきたということです。

池上 名前が付いたいきさつが、これを基礎とすると面白いですね。

渡辺 Paris Clubはね、元々あったんだけれども、これは例の債権国会議と重なるから、我々銀行員だからすぐ出ましてね。

副島 舩橋さんに頼んで。

関本 舩橋さんが、今のヨーロッパ中央銀行のトリシェに。

関本 それが93年の3月1日付のトリシェ宛の書簡です。3

RÉPUBLIQUE FRANÇAISE

MINISTÈRE DE L'ÉCONOMIE ET DES FINANCES

DIRECTION DU TRÉSOR
139, RUE DE BERCY
75572 PARIS CEDEX 12
LE DIRECTEUR

PARIS LE
17 MAR. 93 - 005144

Monsieur le Directeur et cher ami,

Je vous remercie de votre lettre du 1er mars dernier et de la prévenance dont vous faites preuve à l'égard du Club de Paris en me demandant si vous pouvez appeler votre association du même nom.

Non seulement je n'y vois aucun inconvénient mais je m'en réjouis très vivement compte tenu de l'objet même de votre association. Vous savez combien je suis personnellement attaché à la qualité des relations entre nos deux pays. Toute initiative qui, comme la vôtre, permettra d'améliorer la connaissance que nous avons les uns des autres et d'enrichir nos relations mérite d'être saluée.

J'espère, ainsi, avoir un jour le plaisir de vous demander l'autorisation amicale d'appeler "Club de Tokyo" une association française poursuivant les mêmes objectifs que la vôtre.

Je vous prie de croire, Monsieur le Directeur, à l'assurance de ma considération très distinguée.

Bien amicalement.

Jean-Claude TRICHET

Monsieur Haruo FUNABASHI
Director of Coordination Division
National Tax Administration
Ministry of Finance
3-1-1, Kasumigaseki
Chiyoda-Ku
TOKYO
(Japon)

1993年3月17日付トリシェ氏からの書簡
会員寄稿で舩橋晴雄氏が詳しく説明しています

月17日にトリシェから返事が来て、"トリシェはClub de Tokyoというやつを将来求めるかもしれないことを、その時に言っている"という形で快く。ただ、この他に、Paris Club、いわゆる債権国会議のClub de Parisの他にロンポアンの近所にParis Clubと言うバーがあるとか（笑）。ということもあって、いささか何番煎じになるんじゃないかということもあったけれども。

池上 それいうエピソードもありました。そして、発足して、60名出席して、そんなことで始まった。

関本 如水会館でやって、確かその時の見積もりは50人前注文した。

池上 その後の発展のことについては？

渡辺 発展の事については、ひとつはパレナージュというのが副島さんからご披露がありましたけど、もう1つはもっと日本的なことです。我々は企業のOBだったんですよね。それで、いろいろ問題があった。個人的にね。こんなとこまできて上司との上下関係はヤダとかいいとかね。それで1つ決めたことがあり、これは必ずしも守られてないんだけど、もう裃全部脱ごうという話になり、要するに"Paris Clubは個人の資格である"と。

池上 これは大事なところですね。

渡辺 "Paris Clubは個人の場所であって、企業のバックグラウンドはない"というのが最初に取り決めたことなんですよ。ところが、これはなかなか徹底されなくて、私の責任でもあるんだけど。

関本 会則の案にそれを盛り込んだ。

渡辺 会則を読んでもらうとそこに出てるんですが、あくまでも個人なんですよ。だから、賛助会員とかいうのは最近でこそ認められているけど、団体とかは認めない。個人の集まりできたわけです。そうするとですね、"いや、あそこに行って元の部長や支店長に会うのはヤダ"っていうのはないんですよ。"ここは、みんなイコールなんですよ"ということで発足したんです。私の出身母体にもパリ勤務者は、随分いるけど、皆入会してないでしょ。

関本 あー、皆網羅してない。

渡辺 "裃脱いだ個人の集まり"というのがひとつのポイントだったのですが、申し訳ないけどこれが徹底されなかった。

というのは、フランス側が今度はパレナージュと関係してくるんですけど、パレナージュをする時に"あれはどこの人間だ"という逆のことを聞いてくるわけですね。

池上 そうするとその人間のチャネルがわかりますよね。

渡辺 そうそう、ということがあってね。パレナージュという言葉自体は私はどこから出できたのか知らないですけど。私に創ってほしいということを商工会議所から言われて、さっきのような経緯で、副島さんのヘルプを求めて作り上げようとしたでしょ。目的は何か？ さっきも言ったように年何回か集まって云々というんですよね。フランス側は、元々は引き金はLe japon, c'est possible.ですから、それに役立つようなことをやってほしいと、いうような感じですよね。その辺からパレナージュというエスプリが出てきたわけですね。

池上 パレナージュの発展でこういうのが非常にいい具体例だなあというものは事例としてありますか？

渡辺 それはね、池上さんご自身が私に言ってくれたのを覚えていますけど、ランデヴー・フランコ・ジャポネは親睦を深めるために日仏関係のrapprochementが目的だったでしょ。それで、ランデヴー・フランコ・ジャポネを毎月やろうといっていたわけですよね。殆ど毎月ぐらい開いていて、そのうちの一つで池上さんご自身もおっしゃっていたけど、"今日はこういう人に会ってこういうことを三菱商事に紹介することにしたよ"と。有形無形で、我々の知らないところでもかなりの結びつきがあったのではないでしょうか。

関本 そういう精神が息づいたということですね。

渡辺 今でも付き合いがあるので鮮明に覚えているのですが、現在アベンティス・パスツールの社長をしているカミュゼという人が、フルニエ グループという会社の代表で何年か知らないけどご夫妻で来日したんです。ご夫妻で銀座の芙蓉クラブでの会合に参加された。それで初めて"あー、こういう会があるのか"と。"我々は日本のにの字も知らない。ここは非常にいい"ということで、それから足繁く来てくれて、我々もそれにレスポンスして、その関係は未だに続いている。

副島 パスツール研究所支援協会で未だに。奇妙な縁ですね。

関本 パレナージュという気持ちは、最初からとにかく発足の時からそれをやらなければいけないという気持ちはあった。それで、その事をどういう風にするか？ まず場所を決めなければいけないというので場所探しを随分した覚えがありますね。とにかく第1回から数回は芙蓉クラブですね。

池上 そうそう。あれは場所もよかったですね。

関本 場所取りに先に30分先乗りしなければいけないとか難しいことがありました。ランデヴー・フランコ・ジャポネという名前をつけた。

副島 かなり無理して場所も取って…。しかし雰囲気としては、私は最初パレナージュと言ったその言葉ね、役に立ちたいというその雰囲気にぴったりした場所であったわけですよ。皆ソファー的なものに座って、かなりconfortableで。三々五々集まって、いわゆるゆったりしたソファーに座るわけですよ。時々場所を変えて、テーブルの上に食べ物、飲み物を持ってきて、当時1人4,000円でしたかな？

関本 値段設定もよろしかった。

副島 それはね、なんと言っても、intimeなんですね。これが大事で、次ぎから次ぎへともういろんな人に会えた。そして、日本の困っていることをある意味では相談というか話ができた。場合によっては、例えば渡辺守章さん来ら

れる、そうすると文学論が出るんですよね。隣に渡辺さんが座られて文学論をやられてついてけなくて（笑）。しかも、フランス語でね、ボンボン。フランス人が喜んじゃってボンボン受け答える。そういうコーナーもあれば、その向こうではいわゆるregularisationの話しが出るとかね。要するに本音の話ができる。芙蓉クラブは、そういう最初のランデヴー・フランコ・ジャポネとしては皆をintimeする効果があったなと私は思っています。若干場所は無理して取っていたんですけど…。

関本　大変よかった場所だったけれども、実力行使みたいなところがあって、なかなかうまく…。

渡辺　いかにパレナージュというのがうまくいっていたかというか、我々がそれに努力をしていたかということについて2つだけ補足的に例を挙げます。例えば、その頃のデバのタイトルを見て下さい。これは全部、いかにフランス人が日本で成功するためにはどうしたらいいかというdistribution（流通）の話から始まって、そういうことをやったでしょ。

渡辺　ホントに手作りのデバでね、食べながら、飲みながら。

副島　会の柱が二つできましたね。ランデヴー・フランコ・ジャポネといわゆるデバ並びにパネルディスカッション。この2つの柱でいけば、個人的な親しみを持つ場と、公的にいろんな問題を取り上げてディスカッションできる。一度、関本さんから私に規制緩和の話をせいと仰せつかって、メルシャンでやりました。

関本　やりましたね。

副島　これは、ミニデバとしては最初だったわけです。かなり前でメルシャンクラブに移った早々ですね。

関本　そのあと、JETRO。パネルディスカッションが最初にあったということよりむしろ、ランデヴー・フランコ・ジャポネの一つの形態として、したがって、"Vins Sur Vins"という霞ヶ関のレストランで2回やってるんです。

副島　"Vins Sur Vins"はこれまた非常にいい企画でですね、これはついでに申し上げますと、テーブルを10人ずつ位4つ位に分けて各チーム毎に討論をして、その結果を持ち寄るという形式でした。

池上　分科会形式ですね。

渡辺　そうですね。それからもう1つの例はね、これは資料を見ていただくと、在日フランス商工会議所の立派な年報が毎年総会の時に出されるでしょ。当時の年報を見て下さいよ。いかにパリクラブにページが割かれているか。

関本　未だに本年のランデヴー・フランコ・ジャポネが何回やったかというのが商工会議所のRapport Annuelに載っている。

渡辺　商工会議所は、これはちょっとやりすぎだと私は思うんですけど、商工会議所の組織の中の一部に数えちゃっていた。

副島　最初はね、パネルディスカッションというのではなく、最初に出た言葉はTable Rondeです。"Vins Sur Vins"でやったときでもTable Rondeです。確かにTable Rondeというのはさっき渡辺さんがおっしゃったように、身分、上下を問わず、発言は皆にやらせたとてもいい会合であり、Table Rondeは非常よかったです。その時来ていたのが。デュボワ、キャンピングガスのルレ、ラツゥール、ドメスティエやオスタン、特に毎回出席のヴァクジアルの各氏等。フランス人が随分多いんです。当時フランス人と日本人は半々位だったんでしたね。

池上　今つきあっている我々の相手方も、いま出たような名前がフランス側に結構多いですよね。余り変わってないですね。

渡辺　変わってないですね。そこが問題なんですよ。それが将来の問題。

池上　全体が流れてきてますね。パレナージュから始まってデバ、それからランデヴー・フランコ・ジャポネ。これはどちらかといえば経済を論じたる経済の面。その後出てくるのが文化活動だと思うんです。文化活動は今言った外に出掛けるようなイベント。後でお話していただきます。今そのデバ、"Vins Sur Vins"の中の Table Rondeの系統の中でちょっと話さなければいけないと思うのは、やはり10回やったデバのスポンサーをやっていただいた笹川日仏財団に対する我々の感謝の気持ちについてはどうなんでしょう？

渡辺　大いに体制的にも助けていただいた。

関本　97年にウーブリュー大使の頃ですけど、笹川日仏財団の支援で公邸ランデヴー第1回がありました。

副島　ウーブリューさんが、そのスピーチの中で笹川日仏財団に感謝されました。

関本　それから98年の2月がパネルディスカッション10回の第1回です。それから大使がグルド＝モンターニュさんに代わります。98年日本におけるフランス年、そこで"フランス年のロゴ"を申請するのですが、返事をもらえなかった。

関本　パネルディスカッションの2回目以降についてはフランス商工会議所が共催に加わらなくなった。

池上　そうでしたね。

副島　その頃フランス商工会議所にComité Relation Japonというのができたんです。

渡辺　Comité Relation Japon。

副島　関本さん、渡辺さんと私の3人はほとんど毎週、私の記憶ではほとんど毎週集まっていたんです。そこの中での議論の中にも出てきました。理事長も曽野綾子さんに代わったんだし、"笹川財団はいいじゃないか"と言ったら、Comitéのフランス側メンバーは、皆頑として、誰も賛成してくれないんです。だから、これは大変根がふかいものなんだなと思った記憶があります。

渡辺　私は当時、商工会議所の副会頭をしていたんです。私は敢えて理事会に出ないで、"俺いないけど、この問題

討議してくれ”。そうしたら、SOULASからやっぱりNoだって。

池上 言ってましたね。ただ、まあこれは息を長く対応していくということで。

あと、文化活動などがだんだん広まってきて、当初のパレナージュ、経済人というところから少しメンバーも広がってきたし、場合によっては理事会の席上で経済等をとったらどうかという話まで出ましたね。その辺の広まりについて、賛成・反対という意味ではどのように？

渡辺 いろいろな議論がありましたが、具体的に言えば、1つは会則を変えましたよね。会則を変えて、要するに“フランスに駐在した”というのは抜かして、“フランスに関心を持っている人であれば誰でも入れる”という風にしたでしょ。これは門戸開放ですよね。それからもう1つの会則変更は、フランス人を認めたということだし、3つ目を敢えて言えば、賛助会員を認めたということではないですか。ここで時代の流れというのは入れているはずですよね。

副島 そういう風になってくるのは当たり前だという気持ちで最初からいたんです。というのは、本音の話をできるのは、一緒にピクニックをしたり、一緒に工場訪問をしたり、一緒にスポーツもですね。池上さんやカルパンチェさんとはテニスを…。要するにいろんな機会を通してふれあいの場を創ろうという努力の結果というか、必然性といえるんじゃないでしょうかね。だから、渡辺さんとも役員会の後、いろいろと話をしたりしたこともありますけど、経済関係だけでなく文化活動とか門戸開放が入ってくるのは、必然性なんだなあということですよ。

池上 まあ、それだけ関本さんも事務局としては大変になってきますよね。

関本 なんで私が事務局を引き受けたか（笑）、たぶんその頃私が番頭をやっていた会社が、親会社のためにもなるといって、そういうことを許す大株主をいただいておったからに尽きます。今言われたような会則の改正とか…。

池上 それは大きいですよね。

関本 そこでいろんな話題が上り、いろんな動議が出されていますけど、確かに今、渡辺さんが指摘された3点については、スッと決まったと思います。なかなか決まらないのがNPOとか法人化ということですね。

池上 最近、理事会にフランス人が一応三人、まあカルパンチェさんは向こうに行っちゃったけど、でも非常に積極的ですし、あの存在はいいなと思っています。フランス人の理事も積極的に参加して、それもだんだん広がってくる。

副島 しかも理事になってる方をみると、出席率も高いし、非常に貢献している。ヴァクジアルさんなんかもそうだし、真矢さんもそうだし。とにかく熱心ですよね。実体のない人は入っていないから。

渡辺 これについて意見というほどのものでもないですけれども、思っていることは、いくら仲良くても言葉の壁というのは厳然としてあるわけです。それで、パリクラブは我々が怠慢でいたために、日本語ということでやってきたでしょ。ところが我々日本人のパリクラブ会員の大多数は、やっぱりフランス語しゃべりたいという願いがあるんですよ。フランス人と接触して、お話をしたいということがある。そういう意味ではやや矛盾しているんです。だから、日本語だけではなく、もうbrokenでも何でもいいから言葉の壁を取り除いてね、フランス語、日本語、場合によっては英語まで入れる、という風にすれば、もっとフランスの参加は得られるんじゃないですかね。

池上 なるほど。それは、1つの今後へのアイデアですよね。

渡辺 その代わり、正式な書類は日本語にするということでね。

第3部

渡辺 フランス人の行事に対する参加率が減ったというのは、あえて直す必要もないけど考えるべきでしょうね。

池上 この間のランデヴーなんかは比較的来たんですけどね。久しぶりというのもあるし、BAJONを呼んだというのもあるかな？

関本 85名。フランス人は27名。

副島 1つはね、最初の目的というものが大分達成されてきた。やはり、彼等も日本化してきた。日本の事情もよくわかってきた。切羽詰った問題がなくなってきた。特に今日本とフランスの中で大問題になっているような問題というものがだんだん少なくなってきたということが、フランス政府の態度にも言える事です。しかし、我々としてはこういうものは必ず波があるものであって、次ぎに何らかの摩擦も起こりうる、そういうことに対して、我々は継続は力であるということで続けていく。その間に文化交流が比重を少し大きくしていくこともあるでしょう。あるいはもっと個人的な単なるつきあいというものもあるかもしれません。しかし、これを続けていくことがこの次の段階においてまた、パリクラブが役に立つ時代が昔のように出てくる。パレナージュみたいなことも出てくると思います。その1つの表れなんかは、例えばフランス商工会議所の我々に対する期待というものもあるわけですから、あるいはフランスを出てくる企業をお世話しようという話が出てきているみたいですけれども、そういうことが次から次に出てくる。パレナージュの中にも我々はスタジエールを引き受け、企業内でお世話しようという議題が既に理事会でも昔あったわけです。やっぱり、若い人達をもっと参加させたいパリクラブが先導してた日仏青少年交流の問題を今やフランス大使館が大きなテーマとして持っている。パリクラブはこういうものを、土壌作りを含めていろいろな貢献をしてきているわけです。だから、これを続けていけば文化

と謂わず、経済と謂わず、私共は総合的な協力をしていくことができるのではないかと思います。

池上　そうですね。

関本　フランス商工会議所のLe Japon, c'est possible.ですけれども、94年に2年間延長されるんですね。93年、丁度その狭間にこのパリクラブが誕生するということなんですけれども、それが2年経ったところで、95年になりますか、もうLe Japon, c'est possible.じゃなくなるわけです。

もうちょっと続いていたんじゃないですか？

渡辺　私はもうちょっといったと思いますよ。2000年近くまでいってますよ。

関本　それが、双とかアンサンブルとかいうような

副島　パリクラブの理事会で討議されていることは非常に啓蒙的で、しかも先見性のあることがあるんですよ。例えば、94年の8月31日の理事会では、当時は常任理事会と言ったんだけど、そこではスタジエの企業側での受入れを我々は推進しようという発案をしました。もう1つはパレナージュ、それからランデヴー・フランコ・ジャポネですね。もう1つの柱はディネ・デバ。その時にイマージュ・ド・フランスといういうテーマが出ているわけですよね。そういうことを次々に打ち出してきている。これはアイデアもそうだし、実行力もついてきているし、パリクラブがこれからもこういうものを行っていけばかなり両国間のプラスになると思います。

池上　最近、商工会議所が日本に来て個人というよりもフランスコミュニティの問題としているのが料金です。ダブルコストになって、早く解決したいというのがあって。日本側で受けてたってお手伝いしているのは正式にはまだパリクラブしかない。そのフランスの人達の全体の問題に対して取り組んでやる。あまり力はないにしても、例えば教育の問題。関本さんがおっしゃったようなTFIだとか。そういうものについての協力。ちょっとこう大きいものも1つずつ混ぜながら、両方やっていったほうがいいと思うんだけど。

副島　今から2年位前に、池上さんの方から協力してやろうと、我々のほうから直に手紙を出そうということを討議したことがあります。その時に若干そういう問題で手紙を出しても…という発言もあったですが、あの時に私は出してよかったと思います。我々がそういう根本問題に関する手紙を大使館あるいは外務省に出すという、これは我々としては1つの大きなステップなんですよ。あの時はジャンピング・ステップですね。だからそれがきっかけとなって、いろんな方面にParis Clubと商工会議所で官庁の方にも訪問をされたし、こうして少しスケールも大きくなっていく経過を経ているということは私はいいことだと思いますね。

池上　会員サービスの年金のセミナーについてもこれも皆さんに一生懸命やっていただいて…。

渡辺　結局は皆さんの出身母体である企業が何にもしてくれなかったけれども…、という意味では随分感謝されましたね。私の知らない人からも感謝の電話もらったり…。

関本　あれで会員も増えた。

池上　これも広がりの1つで、そういう会員の方へのサービス。今後ですが、そういう広まったものを1つ求心力で、コアとしてやってきたわけですが、ますますがっちりと支えていっていただきたいと我々は思っています。そんなところですかね。

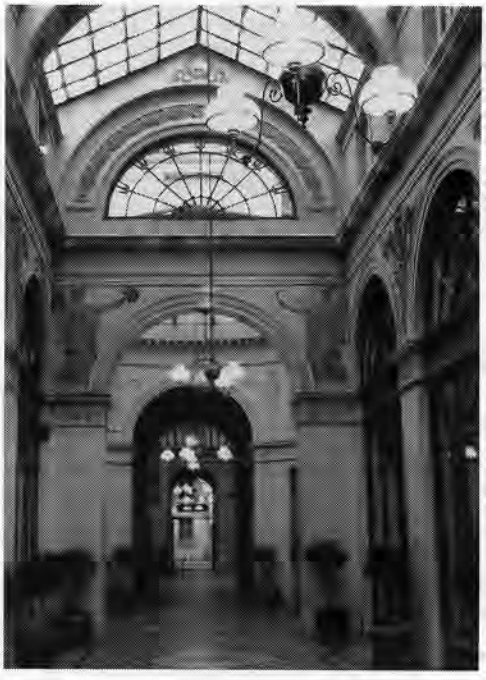
渡辺　パスツール研究所支援協会をやっていて、たまたまなんですけど、NPOの本を読んで…、やっぱりNPOを創るべきだと思いますね。面倒臭いけど書いた通りにやればできますよ。特定非営利法人になれば、これはクレディビリティが増します。有形無形でもいいんだけどね、やっぱりNPOにして、その1つがデバ、その1つがなんとかという風にやるべきだね。

副島　今のボランティアでこれをやったら大変な作業ですから。その書類作りを誰かが一手にやるというのでなく、どこかに頼まないとそれはできません。ということで、予算的にはその分はかなりみなければいけないが、私はそれぐらいの価値はあるし、パリクラブは既にNPOになれる活動もしてきたし、経験もある。

ということで、是非NPOにしてもらいたい。

関本　もう1つ。今まで商工会議所との関係、恐らく大使館との関係について、実は96年の核実験という時のあれは大変苦しい時だったと申し上げていいと思います。応援するわけにもいかないし、ウーブリューさんから朝飯に呼ばれて、理解を求められたりしたこともあった。そういうことは、恐らくパリクラブの活動には入らないと思いますが、それ程の存在にその時にはもうなっていたということです。

池上　わかりました。どうも。いろいろとまだまだ話足りないと…。



Le Japon, c'est possible以前のこと

誌上参加　小松原 道彦

現、在日フランス大使M. Bernard de Montferrand氏の着任のご挨拶のなかで、「今やフランスは日本における第二番目の外国投資家となり、日仏関係は良好で、とりわけ問題はない。私にとってはそこが問題で、この順調を保持していくことの辛さがある」というような意味の発言をされていたが、私には強烈な印象として残っている。

パリクラブは“Le Japon, c'est possible”の運動が原点であったことはよく言われるが、実はその前のことでフランス側に私は多少かかわりをもっていた。

1980年代頃は「ジャパンバッシング時代」であったかも知れない。Mme. Cresson首相が日本製品の追い出しにかかり、日本製品の輸入品の税関をポワティエに移したりしていた。

当時、日本のマスコミは勿論このイヤガラセを報じていたが、フランス人にとっては「このポワティエの地こそ、フランスがサラセンからの攻撃から守った歴史的意義をオーヴァーラップしていたのだ」という解説をフランス側の識者から聞き、呆然とした記憶がある。

1990年の初めから3年半ほど私はパリーのL'Air Liquide本社でDirecteur du Développement International du groupe de L'Air Liquideという職で仕事をしていた。日仏関係もやや反省期に入りかけたこともあり、こんな関係で、いろいろな集会に呼び出されたり、雑誌に書かされたりもした。先方の言い分は「あなたのところの会社は日本に1907年（明治44年）に進出、二度にわたる世界大戦、戦後の混乱も乗り越え、終止フランス側と仲良くやって来た成功例として、その経験とノーハウを語ってください」ということであった。

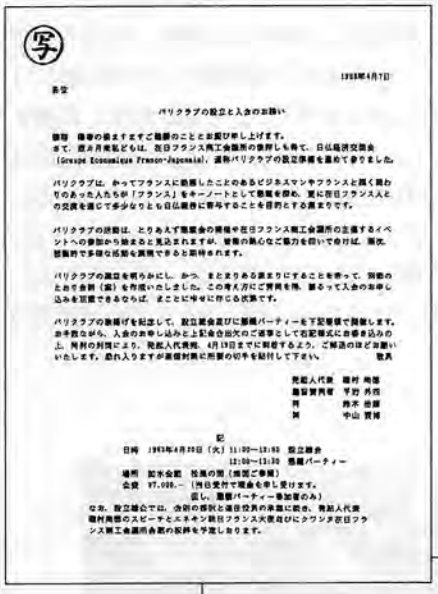
私は「成功した」とはとても面映いが「すこしでも日仏関係のためにお役に立てるのであれば」ということで何回かお受けしたのである。

以下手許に残っている当時の資料から、そのうちいくつかを拾ってみると：

'90/06/20　Réussir au Japon　日本における成功
　　Ministère de l'Industrie　フランス産業省主催
'90/10/25　Le Japon, c'est possible
　　Ministère de l'Industrie　フランス産業省主催
'91/01/23　Industrie Japonaise
　　Fondation Ecole Polytechnique主催
'91/03/21　Comment les Japonais forment leur ingénieurs
　　日本の技術者の養成　L'Usine Nouvelle社記事
'91/04/09　Ce que attendent de nous, les clients Japonais
　　日本の顧客の我々に望むもの
　　CRC、フランスビジネススクール主催
'91/05/31　Les difficultés rencontrées par une société multinationale
　　名前の変遷からうかがいうる多国籍企業の悩み
　　La "Réunion Amicale Franco-Japonaise" à Nancy
　　ナンシーにおける日仏親善会
'91/06/24　Approche du Management en France et au Japon
　　日仏マネージメント方式の差　雑誌記事
'91/10/04　Faut-il collaborer avec les Japonais ?
　　日本人と協力する必要ありや？
　　雑誌Expansion主催
'91/10/27　Les obligations morales en Extrême Orient
　　東洋の仁義　雑誌記事

等々がある。これらの一連の作業の末、あまりどぎつい名前を避け、このキャンペーンの名称が“Le Japon, c'est possible”と統一され、その動きがフランス産業省－在日フランス大使館－在日フランス商工会議所と伝わって来たものと思われる。

パリクラブ設立趣意書



1993年4月7日

拝啓

パリクラブの設立と入会のお願い

時節　穏春の候ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、昨年月来私どもは、在日フランス商工会議所の後押しを得て、日仏経済交流会（Groupe Economique Franco-Japonais）、通称パリクラブの設立準備を進めて参りました。

パリクラブは、かつてフランスに勤務したことのあるビジネスマンやフランスと深く関わりのあった人たちが「フランス」をキーノートとして結集を図め、常に在日フランス人との交流を通じて多少なりとも日仏親善に寄与することを目的とする集まりです。

パリクラブの活動は、とりあえず職業会の開催や在日フランス商工会議所の主催するイベントへの参加から始まると見込まれますが、皆様の熱心なご協力を仰いで発行は、開次、想像的で多様な活動を展開できると期待されます。

パリクラブの設立を明らかにし、かつ、まとまりある集まりにすることを狙って、同封のとおり会則（案）を作成いたしました。この考え方にご賛同を頂、誘って入会のお申し込みを頂度できるならば、まことに幸せに存じる次第です。

パリクラブの発足げを記念して、設立総会及び記念パーティーを下記要領で開催します。お手数ながら、入会のお申し込みと上記会費出欠のご返事として右記様式に必要を込みの上、同封の封筒により、発起人代表宛、4月19日までに到着するよう、ご厚意のほどお願いいたします。恐れ入りますが連絡先に所要の切手を貼付して下さい。　敬具

発起人代表　堀村 隆彦
幹事賛同者　平野 外四
同　鈴木 俊郎
同　中山 賢輝

記

日時　1993年4月20日（火）11:00～13:00　設立総会
　　12:00～13:30　懇親パーティー
場所　如水会館　松風の間（地図ご参照）
会費　17,000.－（当日受付で現金をお支払ください。）
　　（但し、懇親パーティー参加者のみ）

なお、設立総会では、会則の承認と運営役員の承認に続き、発起人代表堀村氏間のスピーチとエネキン誌仏フランス大使館及びにクワンタ在日フランス商工会議所会長の祝辞を予定しております。

日仏経済交流会会則（案）

（名称）
第1条　当会は、日仏経済交流会（Groupe Economique Franco-Japonais）と称し、通称としてパリクラブを用いる。
（目的）
第2条　当会は、過去にかつてフランスに滞在したことのあるビジネスマンを中心にフランスと深く関わりのある各界の分野で活躍する日本人を会員とし、会員間に親睦の場を提供するとともに、広く本邦で活動するフランス系人及びに在日フランス商工会議所との交流を深めることを目的とする。
（事務所）
第3条　当会の主たる事務所は、東京都千代田区麹町1丁目4番1号半蔵門ＭＫビル在日フランス商工会議所内に置く。
（会員）
第4条　会員は、他の会員3名の推薦に基づき理事会が承認する日本人とし、総会における議決権を有する。会員のほかに名誉会員を置くことができる。名誉会員は、同種を問うことなく理事会が推薦した者を満める個人で総会が承認したものとし、総会における議決権を持たない。
（会費）
第5条　会員は、理事会が定める会費を納入しなければならない。
（組織）
第6条　当会発起人は全員が評議員となる。評議員の任期は1年とするが重任を妨げない。辞任または解任する評議員の後任には、当該評議員の推薦する会員の中から会員が選任する。
第7条　評議員会は、会員の中から15名以内の役員を選出する。役員の任期は1年とするが重任を妨げない。
第8条　役員は互選で会長1名、副会長1名、理事若干名及びに監事2名を互選する。
第9条　会長、副会長及びに理事をもって理事会を組織する。理事会は会務を掌理し、当会の運営を司る。
第10条　当会の円滑な運営をはかるため、理事会の決定により、理事会の下に事務局並びに専門委員会を置くことができる。
第11条　監事は会務を監査する。
第12条　評議員会は毎年度に1つ通常会員の資格に応じる。
第13条　会員は毎年1回会員総会を召集して会計および会務全般について報告を行ない、その承認を受けなければならない。
第14条　理事会の発議または評議員3名以上の請求もしくは監事全員の請求がある場合、会長は臨時会員総会を召集しなければならない。総会における議決は出席会員の多数決を原則とする。
（会計）
第15条　当会は会員の納入する年次または臨時の会費および寄付金等を財源にしてその運営をはかる。
第16条　当会の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終了する。
（規則）
第17条　当会会則の改正案は理事会または会員30名以上の発議によって総会の議決に付すものとする。その議決には出席会員の3分の2以上の同意を要する。
第18条　年次会費の納入を怠る会員は退会したものと見なされることがある。
（付則）
この会則は1993年4月16日から実施する。